



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.100
2012.1.1
謹賀新年

*考古学研究所(株)アルカは石器と土器の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

縄文の使用痕

—石器と先史時代の生活がもっと明らかになるために—

第22回

魂送り?

写真は、三内丸山遺跡出土の両面加工石匙です。北海道産黒曜石を素材とするこの石匙は、両側辺は写真1のように微小剥離痕は顕著ではありませんが、高倍率の観察では線状痕や光沢がみられます(写真2)。線状痕は刃部に対して平行方向・直交方向とあり、切ったり削ったりするような作業が想定されます。先端の尖頭部は摩滅で表面が白濁し(写真3)、黒曜石本来の平滑なガラス質は失われています(写真4)。北盛土から出土しているこの資料は、使えなくなって廃棄されたような資料ではありません。

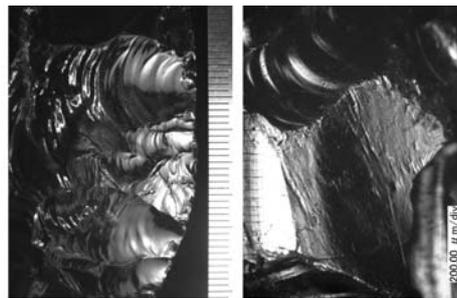
梶原洋氏による宮城県三神峯遺跡の石匙分析以降、石匙は刃部再生を繰り返しながら使用される管理的な石器と定義づけられました。ただ縄文時代の遺跡は、遺物包含層から土器・石器などが大量に出土しています。関東中部地方では、住居覆土から、吹上パターン、井戸尻パターンと呼ばれる廃棄パターンがあり、やはり大量の遺物が出土します。そして写真のような遠隔地石材であろうと、在地石材であろうと使えそうな資料が大量に出土します。

川口潤氏は、青森県熊ヶ平遺跡(報

告書386頁)の遺物包含層出土剥片石器から、刃部再生が頻繁に行われたにもかかわらず大量に廃棄されたことは、刃部再生が新たな使用を前提とした場合整合性を欠くと指摘しています。第14回、第20回で紹介したような石器の作り替え・転用などといった場合を除き、使用痕分析でははっきりと刃部再生が行われたといえる資料は少ないです。遠隔地石材といえども、剥片石器は徹底的に使用される様相ではないと言えます。

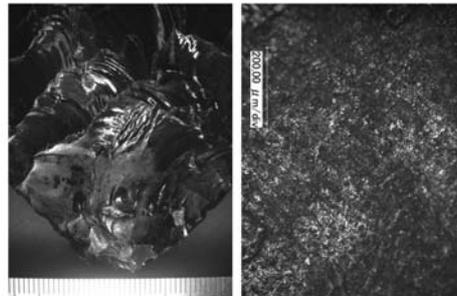
河野広道氏、吉田敦彦氏、渡辺誠氏はアイヌの物送り、縄文神話、死と再生など縄文時代の精神世界について言及しています。第20回で紹介した反方向の剥離も、刃部を破壊することで道具の魂を抜く行為かもしれません。遺物包含層から出土する石器がそうした思想から廃棄されているのなら、管理的・便宜的という枠組みのみでは十分に説明できなさそうです。

遺物写真は青森県教育庁文化財保護課所蔵品の写真を同機関より提供いただいた。
顕微鏡写真は筆者撮影



1 側辺部

2 側辺部(高倍率)



3 先端部

4 先端部(高倍率)

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

■縄文の使用痕	魂送り?	高橋 哲 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイスレット・サイト(第93回)	藤川智之 …3
■考古学の履歴書	良き師・良き友に恵まれて	渡辺 誠 …2	■考古学者の書棚	『実験考古学』	久保田正寿 …4

考古の履歴書

良き師・良き友に恵まれて(連載第1回)

渡辺 誠

人は一人では生きられないのと同じように、研究もまた多くの方々に支えられてはじめて成り立っている。古稀を少し過ぎて、今までのことを振り返ってしみじみそう思う。感謝の心を込めて、改めて自分の足跡をたどり直してみたい。

I. 高校から大学へ

母校福島県立磐城高校の史学部は、昭和20年代に全国の他の高校と同じように、活発な地域考古学を展開した。このことは斉藤 忠先生も学史のなかで指摘されている。そしてその成果は毎年の文化祭のなかで披露されていた。中学生だった私も毎年磐城高校の文化祭を見に行った。とても楽しみであった。まったくの個人的見解であるが、大学の文化祭より値打ちがあったように思う。よし入学したら必ず史学部に入れてもらおうと思っていた。しかし昭和29年の入学直前の秋、その文化祭の時の失火だと言われているが、高校は全焼した。その燃え上がる炎は衝撃的で、今でも目に焼き付いている。

それでも史学部に入部した。嬉しかった。部長は3年生の菅原文也先生で、あちこちの遺跡を見に連れて行ってくれた。地域の特色として貝塚が多かった。

火災後、先輩達は焼け残った旧寄宿舎の部室に遺物をまとめ、焼け跡からも運びこまれたという。そのなかには、後に重要文化財に指定される天冠埴輪もあった。

菅原文也先生は、國學院大学卒業後帰省して教職につかれたが、この時もよく湯本の家にお邪魔した。そして一時県の文化課に出向されたことがあったが、この時に会津地方の三島町荒屋敷遺跡の発掘が行われることになり、その調査指導を私に任された。低湿地のとてもいい遺跡で、自分の手で初めてアンギン(編布)を取り上げることは感激であった。

さて部室にまとめられた資料の整理は、私達後輩に残された仕事であったが、私が3年になり真剣に責任を感じ始めた時、どのように遺物番号を付けて、全体がすぐ分かるように整理するかということになった。そしてそういうことは、大学の研究室を訪ねて教えて頂くしかないということになった。ではどこかということになると、さっぱり分からない。相棒で副部長の鈴木重美(しげよし、しげみではない)君とも話し合ったが、よく分からない。しかし唯一わずかに関係の糸が繋がっているとすれば、明治大学しかないということになった。

なぜかというと、天冠埴輪の出土したいわき市(旧高久村)神谷作101号墳の発掘には、明治大学考古学研究室の創設者後藤守一先生の御指導を頂いており、部の機関紙「考古」の題字も後藤先生より頂いたものである。しかし私には先輩達の時代のことであり、どうなるとも分からない。それでも「ああ高校か」と思い出して頂ければ、ありがたいということで突撃訪問をしたのである。昭和31年4月初旬のことである。

たずねたずねて当時の2号館3階の研究室の前のたどり着いたが、ドアはしまっている。しばらくどなたか来ないかなと立っていたら、隣の刑事博物館の若い先生が来て、アポ無しで来

たってこの先生方は忙しいんだから駄目だよと言われた。それでも仕方がないから、僕の友達の一番若い先生に頼んであげると言ってくれた。救いの神のようであった。電話の返事は、1時間待ってくれたら着くからということであったが、それが大塚初重先生であった。

そして丁寧に教えて下さった。特に遺物番号の付け方は、戻って早速そのとおりにしようと思ったが、さて困った。明治流に、遺物番号—時代略称—遺物番号と書けばいいのだが、石鏃には書ききれないし、片面真黒になって資料価値が無くなってしまふのではないかと申し上げたら、「君、いいことに気がついたね」と言って、頭を撫でてもらった。その時の記憶が残っているから、今でも大塚先生の前では、子供の時のように素直になれるのだと思う。そして教えて下さったのがポリ袋である。

これは最近アメリカから伝わったもので、ここに番号札と鏃を入れて、焼火箸で口を閉じればいいのだが、何度も使えるように遠くから順にふさぐんだよと言われ、地図を書いてアメ横の店を教えて下さった。封筒サイズの小さいポリで、記憶が間違っていなければ、110枚180円だったと思う。そもそもポリ袋なんて知らなかったし、やっぱり東京は違うと言いつつ。

当時雄山閣の日本考古学講座が始め、むさぼるように読んだ。当時田舎の本屋にはいつも一冊しか入荷せず、よその人に買われないように、平(現いわき)駅前の書店に日参したものである。上記のような体験に加え、講座を読むほどに明治大学にあこがれていった。そして進学校を決めつつあった菅原先生にも、いろいろ教えて頂いた。鈴木君とは一緒に明治で勉強しようねと誓いつつ。

しかし卒業間近の1月、いわき市(旧高久村)久保ノ作洞穴の発掘が慶應義塾大学によって行われ、いろいろ大学の様子を聞くうちに少し気持ちの変化を生じてきた。しかし所詮母子家庭のことである。卒業後1年間は働いていた。この年の7月には江坂輝弥先生によるいわき市(旧小名浜町)寺脇貝塚の発掘もあり、参加させて頂いた。

休日は遺跡見学で気を紛らわしていた。奈良時代の製塩遺跡である大原貝塚を発見したのもこの頃のことである。結局は慶應へ進学した。江坂先生が親切に教えて下さると言っただけで、何よりも貝塚の専門家であることに惹かれていった。青森に発掘に行かれる時に途中下車された時には、発刊したばかりの考古学ノート2『縄文時代』を下された。貝塚から出土する貝や骨の種類をどう勉強したらいいのか質問したことを、覚えて下さっていたためである。大塚先生が明治に来なかった裏切り者だよと冗談に言われるのは、こう

略歴

昭和13年11月18日	福島県平市大町(現いわき市)に生まれる
昭和32年3月	福島県立磐城高校卒業
昭和33年4月	慶應義塾大学文学部入学
昭和43年3月	同上大学院博士課程修了
昭和43年4月	古代学協会平安博物館勤務
昭和54年8月	名古屋大学文学部助教授
平成元年4月	同上教授
平成14年3月	同上定年退職、同上名誉教授
平成15年4月	山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで)
平成18年7月	日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)

した経緯があったためである。

先にいわき地方には貝塚が多いと記したが、私の家の本家の山にも片寄貝塚があり、興味をそそられていたのである。

さて慶應へ入学したものの、考古学の専攻はなく、江坂先生のお勧めにより東洋史にはいった。前後の学年に考古学を

学ぶものはほとんどいない。授業も少ない。そのため江坂先生のお手伝いしながら勉強の合間には、鈴木君を頼って明治へよく遊びに行った。そしてできた友人は、今でも親しくしている野村 崇・外山和夫・中島利治・熊野正也・工楽善通氏などである。

隔月連載です。次回は石井則孝先生です。

レイエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 93

阿波国府跡 ～ 徳島県徳島市国府町ほか

藤川 智之

古代阿波国府は、『倭名類聚抄』に「名東郡に在り」と記されており、近世段階にはすでに徳島市の東部の国府町に置かれていたと認識されていた。吉野川の一支流である鮎喰川が形成する国府町を中心とする三角州状扇状地は、国分寺・国分尼寺などもある阿波国の中枢であった。

その所在について、大正期から昭和40年代までに出された説は、地名や条里地割を重視したものであった。その後、昭和50年代以降に徳島市教育委員会によって10次にわたる確認調査が行われたものの、国府に直結する成果は得られなかった。大きな転機となったのは、埋蔵文化財センターによって実施された調査で、平成4年から延命・矢野・観音寺の各遺跡が、さらに平成10年からは北に続く敷地・池尻桜間の各遺跡が対象となった。

発掘調査では、奈良・平安時代を中心とする多くの遺構・遺物が確認されたが、最大の発見は木簡であろう。

200点あまりの木簡は、大部分が微高地の北西寄りの河道内から出土したものである。河道の調査は湧水などで手間取りますが、粘質土により木質が遺存したのは大きな幸運であった。

木簡の内容は、文書・付札・習書など多岐にわたっており、阿波国府と中央や国内の各郡とのやりとりを記した木簡は、出土地がまさに政庁に隣接していることを明らかにした。この木簡群の評価については、古代史のみならず日中関係史や国語学など多方面から行われている。

主な木簡の内容を紹介すると、7世紀後半の木簡に記された「国司」「五十戸税」は成立前後の国府の状況を示す非常に貴重なもの。また、「子曰く、学びて時に之を習う。亦説

ばしからずや。」で始まる『論語』学而篇第一節の一部を記した木簡は7世紀前半に遡るものと考えられ、日本最古級のものであるとともに、国府やその前代に置かれたとみられる評価よりも年代的に古いことになる。

観音寺遺跡の調査では、河道内からのものを中心に7世紀の膨大な量の遺物が出土している。遺構が広がる微高地部分が調査されていないため詳細は不明ながら、建築材や祭祀具などの木製品からは、この地に豪族居館的な規格性の高い施設の存在が垣間見える。

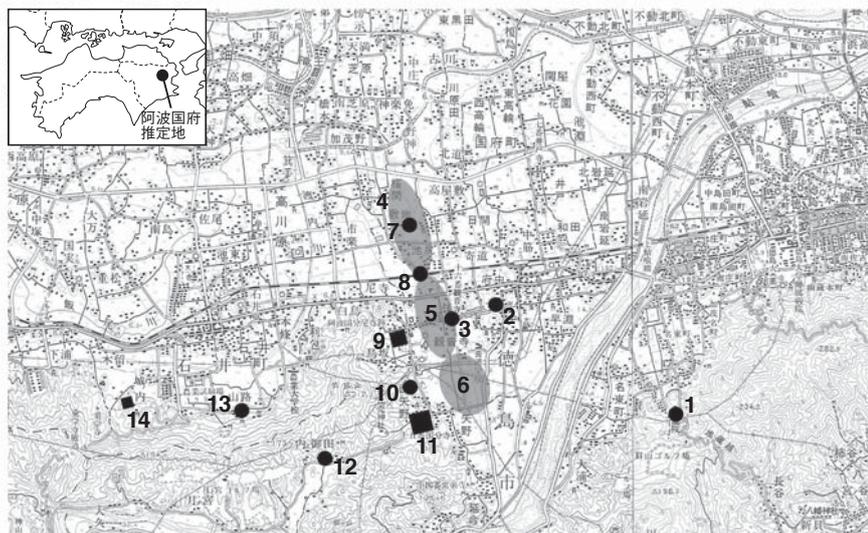
すぐ西に隣接する名西郡石井町の中王子神社に御神宝として伝えられる「阿波国造墓碑」がある。磚造りで傘と台座を伴うと見られる形状で、「栗凡直弟臣」が養老年間に国府の置かれた「名方郡大領」として葬られたことがヘラ書きにより記されている。『続日本紀』などの記述から、阿波国造は栗氏であることが知られ、若干の飛躍を承知の上でいえば、「論語」木簡についても後に国府が置かれる地を本拠とした栗氏の手によると推定される。

国府域では瓦類が一定量出土するが、近接する官宮寺院(国分寺・国分尼寺)を含めた周辺の寺院においても瓦当文様を共有するが、その範囲が栗氏の勢力範囲と考えられている。

木簡をはじめとする遺物によって国府における地方行政の実態を明らかにした点で阿波国府周辺の調査成果は特筆すべきであるが、地方の古代氏族の動向も併せて知ることができた点に関してそれ以上の評価ができる、と考えている。

なお、文中で紹介した木簡をはじめとする阿波国府関係の出土品の一部と阿波国造墓碑は徳島県有形文化財(考古)に指定されている。特に、阿波国造墓碑は木簡出土によってその価値が再認識された。徳島県立博物館および国立歴史民俗博物館の「碑の小径」にそれぞれ複製品が展示されている。再度注目して見てほしい。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは近藤 玲さんです。



- | | |
|----------|-----------|
| 1 穴不動古墳 | 9 阿波国分尼寺跡 |
| 2 大御和神社 | 10 矢野古墳 |
| 3 政庁推定地点 | 11 阿波国分寺跡 |
| 4 敷地遺跡 | 12 内御田窯跡 |
| 5 観音寺遺跡 | 13 中王子神社 |
| 6 矢野遺跡 | 14 石井廃寺 |
| 7・8 国司館 | |

考古学者の書棚

「実験考古学」

中口裕／雄山閣出版(1975)

久保田 正寿

「実験的研究に従事する人は、多くの可能性の中から選んだ方法で成功すると、それ以外に他の方法があり得ないと錯覚し、それがあくまでも実験の域を出ないことを忘却しがちになるのである。」これは佐原真氏が、1972年考古学ジャーナル74号に掲載した実験考古学に対する警鐘ともいべきものである。換言すれば、実験結果と考古遺物の整合性、すなわち検証方法が明確でない実験は、科学ではないとする痛烈な批判である。折しも、私が大学を卒業し、青梅市教育委員会社会教育課に配属されたのが、この年の4月である。その後、私はこれまでの経験を生かして、何回か土器づくりの講座を開催してみたが、佐原氏の批判と主催者としての責任の重さを痛感し、講座を継続し開催することはなかった。

このような状況の中で接したのが、標記の『実験考古学』で、私の土器焼成実験を再出発させた一冊である。周知のとおり、中口氏は実験を繰り返す中で銅鐸の鑄造技術を復元され、1972年には同じ雄山閣出版から「銅の考古学」を著した。そして、1975年、氏がそれまで経験した実験研究や学史的な内容を含め、実験考古学の学問としての有効性をまとめたものが本書である。

再出発の直接の契機となったのは、本書の39頁「IV実験考古学の歴史」の冒頭にある「本当の意味で銅鐸の鑄造技術がわかりかけたのは、惣型、流し型、焼惣型、焼型、蠟型、鑄造式溶接等、殷の時代から江戸時代までの、一通りの鑄造技術がわかってからのことであった。」という一節である。これは前述した佐原氏の批判に対し述べたものでもある。控えめな表現ながら、実は、検証に裏付けられた実験を基礎に、銅鐸の鑄造技術だけに固執するのではなく、鑄造技術史のなかに位置づけたという自信に満ちた表現なのである。この、個別技術の検証は実験考古学の基本的手法であることは、いまさら述べることはないが、技術史の中での位置づけは、実験考古学を歴史学とするための理想的なあり方と言える。技術史の中で捉えることで、それぞれの技術を受け入れた社会について、製作技術を切り口として、比較しながら語るができるのであり、実験考古学を科学としての方向性を示した、重要な著作であると評価されるものであろう。

ここで、私は縄文土器の焼成技術の復元を中断し、土師器の焼成方法の復元に向け、実験を開始することになる。

その理由は、縄文土器とは対照的に、「土師窯」という用語で、焼成した場所と思われる遺構が報告されていたことであった。これによって焼成技術の検証が可能になるのではと考えたからである。

「土器の焼成」久保田／クオリ(1986)は、遺構の集成と民族例を参考に実験を重ねた結果、まとめたものである。技術上の特徴は、若干の薪とワラを燃料に、ワラ灰で覆う「覆い焼き」という技法の提唱に尽きる。この焼成技術の属性については、拙書をご覧になっていただくとして、要点は出土する遺構との検証、黒班の発生要因、焼成温度空間を確保した最も初期の焼成技術史的な位置付けなど、新たな視点を提示することになったのではないだろうか。また、土器は縄文土器、弥生土器、土師器と時代が下るに従って焼成温度が高くなるという根拠なき定説がある。これについては、「覆い焼き」では初期の温度上昇が緩やかなため、緻密な粘土を焼成することが可能になり、緻密さゆえに焼きあがったときに硬質感を伴ってくるのである。このため高温で焼かれたのではないかと思いついていたというのが結論である。

実験は高じて、近年では煙管窯での焼成、須恵器の製作と焼成にまで手を広げるありさまであるが、技術史の中の位置付も、おぼろげながら見え始めてきた。このように異なる社会の技術復元を目指すことで痛感することは、素材観念の相違、関連技術、さらに学術的に使用する用語に至るまで、整理がされていないことである。その技術が成立した社会と矛盾した概念を排除しなければならないことは、至極当然のことであるが、特に須恵器をふくめた土器の製作技術、焼成技術に関してみれば、陶芸技術の高度な知識が邪魔をして混乱が著しい。

その一例に、縄文土器も含め土器は「素焼き」であるという表現がたびたび用いられる。「素焼き」とは江戸時代に陶器の歩留まりを高めるために考案された焼成過程であり、本焼きが前提である。したがって、土器に対し「素焼き」は不適切な使い方である。あえて用いるとすれば「素焼き状態の器」とでもすべきであろう。さらに、酸化焼成、還元焼成といった概念も間違えて安易に用いられている。このように、用語についても、異なる社会環境、技術史と矛盾して用いられる点を修正しなければ、実験考古学は危ういのではないだろうか。このような視点も標記の一冊から生まれたものである。

皆様のお陰で100号を迎えることができました。

厚く御礼申し上げます。

今後ともよろしく願い申し上げます。

編集長 角張淳一

アルカ通信 No.100

発行日 2012年1月1日
 発行人 角張淳一
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp